

## 手紙からみたモレ時代のシスレー

二瓶恵・和泉涼一

### 1 はじめに

印象派の画家たちのなかでいちばん筆まめであったのは、おそらくカミーユ・ピサロであろう。リウールドによれば<sup>(1)</sup>、彼は1883年から1903年までに、息子のリュシアン宛てに477通の手紙を書いている。平均すれば半月に一通の割で、これに画家仲間や画商、批評家たちへの手紙が加われば、優に1,000通は越えるだろう。さすがは印象派の取りまとめ役であったピサロである。あるいはほとんど神経症的に弟に手紙を書き続けたゴッホの場合、その手紙の数は900通にも及ぶ。その生涯がわずか37年にすぎなかったことを思えば、この数は尋常ではない。ゴッホにとって手紙を書く行為は絵を描くそれと異なるところはなく、したがってその書簡集がいまや芸術の輝きを放つようになったのも首肯しうる。これらの画家たちとくらべるなら、シスレーの残した手紙はまことに少ない。過去において公開済みの手紙は、同じくリウールドが言及したデータを集計するなら<sup>(2)</sup>、全部あわせても50数通にすぎないだろう。その宛先はモネやタヴェルニエなどの画家仲間、シャルパンティエやミュレルなどの支援者、あるいは画商のデュラン＝リュエルなどである。未公開の手紙については、たとえば彼の作品をほぼ独占的に扱った画商ポール・デュラン＝リュエルのアーカイブにもまだ保管されているので、総数がどれくらいになるかは不明である。しかし公開されたものについては以上であり、他の印象派の画家たちとくらべていわずに一次資料が少ないのははっきりしている。とくに晩年にはあまり世間と付き合うこともなくモレに引きこもっていたこともあって、その傾向がはなはだしい。

この論考では、シスレーが遺し、かつ公開された数少ない手紙を検討し、それに関連する他の画家や批評家たちの手紙や証言を参照しつつ、モレ時代の画家の姿を同時代の諸相のなかに浮かび上がらせることをその目的とする。シスレーの芸術性はそうした作業をつうじてさらに理解が深まることになるだろう。したがってここでの我々の立場は作品そのものを論ずる内在的批評ではなく、あえていうなら手紙を通じた伝記批評のそれであり、いわゆる素朴実証主義の立場がとられることになる。基本的には画家がパリ南東のロワン川の周辺に居を定めた1880年以降の手紙が対象となるが、その主たる底本は、1939年にリオネロ・ヴェントゥーリが編集した資料集（書誌参照）である<sup>(3)</sup>。また紙幅の都合上、本論考ではモレ時代の前半、1880年代半ばまでを主たる対象とし、それ以降については稿を改めることにする。

### 2 1878年と1879年

おそらく、最初に邦訳紹介されたシスレーの手紙は、ガシェ博士が編集し、式場隆三郎が昭和10年に翻訳した1878年2月15日付のものだろう<sup>(4)</sup>。レイモン・コニアによればこの

前年の1877年にフランスは普仏戦争後の好況から不況に突入し、1872年からシスレーの作品を採算を度外視して（つまりまったく売れないことを前提として）一手に引き受けていた画商ポール・デュラン＝リュエルは苦境に陥った<sup>(5)</sup>。彼を頼りとしていたシスレーも当然困窮し、毎週水曜日には支援者のレストラン経営者ウジェーヌ・ミュレールの店で食べさせてもらっていたという。デュラン＝リュエルの援助を断たれたということは、そのまま生活の資を失うことを意味する。すでにシスレーはマリー＝ルイーズ・アデライード＝ウジェニー・レクーゼクと同棲しており、1867年には長男ピエールが、1869年には長女ジャンヌが生まれていた。食べ盛りの子供をふたり抱えての生活は容易でなかったろう。ガシェ博士が紹介するセーヴル時代のこの手紙はそのミュレールに宛てられていて、どうやらミュレールが援助の申し出をしたところ、「現在はきわめて逆境にあることは事実」だが「友人達の助けで切り抜けてゆくことが出来るだろう」から、親切には感謝するが今回は遠慮したい、という趣旨である。もうひとつ文面から読み取れるのは、画家は以前に100フランを借りていて、それを絵によって弁済することになっていたということだ。日本に初めて紹介されたと思われる手紙においてすでに、普仏戦争以来貧窮に陥っていたシスレーが不況によってその困窮の度を一段と深めている姿が垣間見える。

この1878年の4月には、クロード・モネの有力な支援者であり、前年に破産してベルギーに逃亡した元百貨店経営者エルネスト・オシュデのコレクションが競売に付された。この競売にはシスレーの作品も13点含まれていて、1点あたり平均114フランで売られた<sup>(6)</sup>というから二束三文といってよい。シスレーが1878年2月15日付の手紙で「切り抜けてゆくことが出来るだろう」とミュレールの援助を辞退した背景には、まさかそれほどの安値で売られるとはこの時点で予測していなかったであろうから、この競売のことが念頭にあったとも推測できる<sup>(7)</sup>。だが、もちろんこの程度の収入では焼け石に水であったことが、支援者の実業家テオドル・デュレに宛てた1878年8月18日付の手紙から分かる<sup>(8)</sup>。画家はここで、自分のことを「成功を目前にした画家」と表現し、そんな有望な画家に定期的な生活支援をしてくれそうな「理解ある」人物はいないかと尋ねている。この手紙で興味深いのは、6カ月にわたって毎月500フランを支援してくれれば合計で30点の絵を引き渡すと提案していることだ。この提案によれば、支援総額が3,000フランで絵が30点だとすると1点の価格は平均100フランである。デュラン＝リュエルの買い値が200～300フランであったのだから、シスレーの提案価格はその2分の1から3分の1になるのだが、これはオシュデの競売を含むそれ以前の取引が影響していると考えられるだろう。つまりシスレーとしては自己の作品の「実勢価格」といったものを思い知らされたということになる<sup>(9)</sup>。またデュレに「そういう理解ある人」の紹介を求めているのは、おそらくデュレ自身に間接的な形で援助を求めているとも解釈できる。そういうある種の「照れ」のようなものが、「成功を目前にした画家」といった諧謔を文面に呼びこんでいるのだろう<sup>(10)</sup>。

1879年になってもデュラン＝リュエルの苦境は続き、シスレーの困窮も相変わらずである。この4月10日からオペラ通りで恒例の印象派展（第4回）が開催されたが、展覧会の目的についてはすでにドガのグループとモネ、ルノワール、シスレーらの対立は明白であり、なおかつこうしたグループ展では作品は売れないことがはっきりしていたので、モネ

もルノワールもシスレーも参加しなかった。印象派の創立メンバーたちはほとんどが抜けたことになるが、ドガとの芸術上の対立よりもむしろ、これではとても食えないという危機感からの離脱とみるべきだろう。もちろんいかに貧窮してもアカデミズムに迎合してまで売りたいと思ったわけではない。彼らの力量からすれば画壇の主流派や概して保守的な顧客層の歓迎する描き方は容易であったが、けっしてそうはしなかったことからそのことは明らかだ。彼らはあくまでも自分たちの絵をサロンという主戦場で認めさせようとしたのであり、その点では最初からグループ展には見向きもしなかったマネの方針にあらためて合致することになる。

マルク・レストリーニおよびドールトの紹介する1879年4月14日付のテオドール・デュレ宛ての手紙で<sup>(11)</sup>、シスレーはさすがに疲れたのか、「ながいことうだつのあがらない生活を送ってきたことにうんざりしている」と本音をもらす。彼によれば、自分たちのグループ展はたしかに世に喧伝はされて「その点ではとても有益だった」が、もはや（じっさいに絵が売れない以上は）「孤立している場合では」なく、「官展のお墨付きなしでやってゆけるようになるのは、まだまだ先のこと」なのだから、ここが「意を決する時」であり、かくして自分は「サロンに出品することにした」のである。しかし、サロンへの意欲はあったにしても、シスレーがアカデミズムに受け容れられることはない。家賃の滞納でベルヴュの家から追い出されたのはまさに弱り目に祟り目というところで、支援者のシャルパンティエの援助がなければ一家は文字通り路頭に放り出されるところであった。

### 3 1880年

この年のもっとも重要な出来事は、パリ西郊のセーヴル村からパリをはさんでまったく反対の方角にあたる南東の村ヴヌー＝ナドンに転居したことであろう。このときをもって、シスレーの「モレ時代」が始まる。およそ20年前、屋外での制作を目指してモネ、ルノワール、パジールなどシャルル・グレールの画塾の仲間たちをシスレーが誘ったフォンテーヌブローの森は、ここからほど近い。はるばるとパリを通りこす形でセーヌ川とロワン川が合流するこの地にシスレー一家が移ってきた理由として、島田紀夫はこの時期の印象派のメンバーたちにはそれぞれ「印象派の理論と手法に対する反省」が芽生えていたことを挙げる<sup>(12)</sup>。すなわち間もなくジヴェルニーに定住するモネにせよ、イタリア旅行によってルネサンス美術を再評価するに至ったルノワールにせよ、彼らはいずれもそれまでの自分たちの芸術についてなんらかの反省を迫られるにいたったのだが、しかしシスレーだけは「印象主義の目標の妥当性を信じ、その原理に忠実にしたがった」のであり、それゆえこの時期に彼は若き印象派たちの「揺籃の地」に戻っていったのだと示唆するのである。さらに島田は、1870年代に印象派の多くの画家たちが住み着いていたアルジャントゥイユやルヴシエンヌなどのパリ西郊がいよいよ近代化の波に洗われ、「行楽や産業の場所」になってしまったその一方で、「モレやその周辺にはまだ田園の面影」が色濃く残っていたことを転居の理由に挙げている。シスレーのいわゆる「人物画」はきわめて希少で、ほんの数点にすぎない。二人の子供たちの日常を描いた1871年の《勉強》をみればその技量は人物を描かせても尋常ではないと思われるのだが、根っからの「風景画家」としては「人物画」はあくまでも余技であったのだろう。それほどまでに静謐な風景を愛したシスレー

にとって、たしかに俗化したパリ西郊よりもまだまだ鄙びたモレの方が性に合っていたというのは説得力がある。ただし、転居の動機について述べた書簡や証言などの一次資料は管見するかぎり発見されておらず、あくまでも推測の域を出ない。

もうひとつこの年の重要な出来事を挙げるとすれば、長く不振に喘いでいたデュラン＝リュエルがようやく息を吹き返し、シスレーの買い取りを再開したことであろう。リウオルドによると、かねてからの不況脱出の方策として鉄道整備事業が推進され、その結果として「株式市場における投機熱が高まり」、「新しい会社が次々と設立され」て「信用貸し」が大幅に増大した。今日風にいえば公共事業に莫大な予算を投入することで経済を活性化させるお馴染みのやり方である。バブルであろうがなかろうが、景気が上向けば美術市場も活気づくのは今も昔も同様で、かくしてデュラン＝リュエルも苦境を脱し、何年にもわたって売れないままに抱え込んでいた多数の在庫を処分することができ、「これにより、デュラン＝リュエルは重要な取引がいくつか可能となった」のである。そしてデュラン＝リュエルがまさきに手を差し伸べたのが、「印象派の中で最もまずしく、成功をしていなかった」シスレーであった<sup>(13)</sup>。

デンヴァーによると<sup>(14)</sup>、この年の6月にミュレールはシスレーに対し、1,200フランの借金を返済するよう迫っている。律儀なシスレーのことだから返せるものなら返したであろうが、支援者のミュレールが取立て人を差し向けるとまで言うのだから、よほどの不義理であったのかもしれない。こうした状況のなか、デュラン＝リュエルによる買い取りの再開はまことに干天の慈雨であったと推測される。

デュラン＝リュエルは最初の近代的画商といわれるが、それは作品ごとに値を付けて買い取るというやり方と並行して、一括買い取り制を考案したところにある。つまり画家は完成した作品をデュラン＝リュエルのもとへ送る代わりに、いわば給料のようにして毎月の生活費を受け取るというやり方で、これはたしかに貧しい画家にとっては有りがたい取引であったろう。リウオルドはデュレ宛てのピサロの手紙を引用している（1882年2月24日付）。「ぜいたくに暮らせるほどではありませんが、ささやかで、確実な売り上げを得ています。ただかつてのようなことが再び繰り返されるのがこわいだけです」<sup>(15)</sup>。

いずれにせよこの1880年のモレへの移転は、シスレーにとってみずからの印象主義を深化させる契機となり、こうして彼の描く作品はロワン川とその周辺を主たるテーマとするようになる。ただし残念ながらヴェントゥーリにはこの年に書かれたはずのシスレーの手紙は含まれていない。

#### 4 1881年

シスレーにとってこの年はまず、1月に『ラ・ヴィ・モデルヌ』誌のオフィスで開催された個展から始まる。デンヴァーによればこの雑誌は、印象派（とりわけルノワール）を支持していた出版業者のジョルジュ・シャルパンティエが、これらの画家たちを支援するべく1879年に創刊したもので、そのイタリア人大通りにあったオフィスでは、すでに1879年にまずはルノワールの、1880年にはモネの個展が催されていた<sup>(16)</sup>。シャルパンティエとルノワールは格別の仲であったからこけら落としがルノワールであるのは当然として、この順序から推測しうるのは、少なくとも支援者のあいだではシスレーが印象派の主流に

属する重要メンバーであるとみなされていた、ということだ。ただし14点が展示されたこの個展がどんな評判だったかといえは、リウォルドによれば「地味な成功」にとどまったとされる<sup>(17)</sup>。つまり売れなかったということだ。

そして6月、シスレーはイギリス本土の南にあるワイト島へ短期旅行を試みた。フランス各地を精力的に歩きまわったモネや、外国旅行を楽しんでいたルノワールとちがい、こと旅行に関するかぎりシスレーはむしろ出不精である。彼がどんなきっかけで旅に出たのか、またどんな理由でワイト島を滞在地に選んだのかは手がかりとなる手紙も証言もないので、推測する以外にない。しかしワイト島といえばただちに連想されるのがベルト・モリゾの傑作《ワイト島のウジェーヌ・マネ》である。この作品はベルトとウジェーヌが結婚した翌年、すなわち1875年に彼らが新婚旅行として同地に滞在したさいに描かれたもので、シスレーはこの作品に触発された可能性がある。あるいは夫妻からこの島のことを何かの機会に聞かされていたのかもしれない。また費用をどう賄ったかも不明である。旅費が出せるほどの収入はなかったはずだから、あるいは支援者に援助を仰いだか、それとも考えにくい1月の個展でいくばくかの金銭を得たのかもしれない。

以下に引用するのは、ポール・デュラン＝リュエル宛ての手紙としてヴェントゥーリ版では最初のものである。

〔デュラン＝リュエル宛て1通目、1881年6月6日付、ワイト島にて (Venturi, p.55.)〕

拝啓

わたしはいま、ワイト島のライドにあります。島の中をあちこち歩いてみました。カンバスが届き次第仕事に取り掛かるつもりです。この島はわたしが想像していた通りの場所、つまり広大な公園そのものです。わたしにはどうも評判倒れのように思われます。

わたしが絵を描こうと思っている場所は島の西端で、「アラム湾」と呼ばれる雄大なところですよ。大勢の人がピクニックに訪れる場所です。

わたしが今いるライドは、イギリスの海辺にあるすべての洒落た街に似ています。<sup>ファッションブル</sup>  
つまり、絵になるという観点からはほとんど興味をそそられない場所です。いちばん足運ぶのはどこまでも続く波止場です。ここへは、カンバスが届いていることを願いながら〔対岸の〕サウスハンプトンからの船をまちかねて、二日前から何度も行きつ戻りつしています。この件で、今晚ラファイエット通り10番地のベルトラン商会に手紙を書くつもりでおります。事がスムーズに運ぶよう、あなた様の方からも誰か人を遣ってくださいるとまことに有りがたく存じます。

敬具

A.シスレー

画材が届かないというこの手違いについて、2000年版の『図録』では「経済的事情」によるとあるが実のところよく分からない<sup>(18)</sup>。他方、ドールトによれば<sup>(19)</sup>「ベルトラン商会の手落ち」となっている。いずれにせよカンバスは届かず、シスレーは空しく引きあげる



ことになるのだが、もしこの時予定通りカンバスが届いていれば、画家のキャリアはきわめて豊かなものとなった可能性がある。いわゆる海景画をシスレーが制作するのは1897年の夏、つまり死の1年半前のことでしかない。空と水の画家と言われるシスレーだが、少年の頃から海に親しんでいたル・アーヴル育ちのモネとは異なってその「水」とはもっぱらセーヌ川やロワン川のものである。海景画の制作は、もしかすると穏やかな詩情を主調とするシスレーに別の境地をもたらしたかもしれず、海を描いた晩年の作品を観るにつけ、まだまだ壮年期であったこの時代にシスレーがイル＝ド＝フランスではない空と水を描いていたならばと思わざるをえない。

シスレーは8月31日にモネ宛てに手紙を書いている<sup>(20)</sup>。モネは前年のシャルパンティエによる『ラ・ヴィ・モデルヌ』の個展でほとんどの作品を売り切った程度には支持も広がっていたが、オシュデの一件もあって余裕のある生活には程遠かったと思われる。手紙においてシスレーがいうには、モネは「パリから2時間」の距離で、家賃が「600から1,000フラン」の借家に不自由はなく、マルシェは週に一度開かれるし、「とても美しい教会堂」があって、要するに「まるで絵のような眺め」である。つまり近くに住んではどうかという誘いの手紙である。当時モネは破産したオシュデの家族とともにパリ西郊のボワシーで暮らしていて経済的にいよいよ厳しく、シスレーとしてはさらに生活費の安いモネを紹介したのだろうが、それよりもむしろ、この地が彼にとって満足すべき場所であり続けていることをこの手紙から読み取るべきであろう。

## 5 1882年

売れるにはいたらないまでも、少なくともグループの存在感は第一回印象派展の頃とくらべるなら飛躍的に大きくなりつつあり、かつモネやルノワールはまったく売れないという悲惨な状況をわずかながらも脱しつつあったこの時期、シスレーたちを襲ったのは経済恐慌であった。海外投資の不調から年が明けるとパリの証券取引市場では暴落が始まり、2月1日にはユニオン・ジェネラル銀行が倒産、これによりフランスは経済不振に陥る。証券会社に勤務していたゴーギャンが仕事の将来に見切りをつけて退職したのは翌年1月のことだ。

経済恐慌がゴーギャンという天才を美術界に誕生させたのはけっこうなことだが、シスレーのような貧しい画家にとってこれは災難でしかない。ユニオン・ジェネラル銀行破綻の影響で彼の生活を支えていたデュラン＝リュエルは深刻な打撃をこうむったのである。デュラン＝リュエルはこの苦境を脱するために、第7回印象派展を大量在庫の処理のために利用すべく、ドガをのぞく印象派の創立メンバーに働きかけた。モネもルノワールも印象派展はすでにドガのグループが仕切っていたので出品には難色を示したが、最終的に了承したのはデュラン＝リュエルを救うためという理由からであった。ピサロはモネに宛てた手紙（2月末）のなかで、この展覧会はわれわれのためでもあるが何よりもあれほど世話になったデュラン＝リュエルのために必要であり、彼を救わなければならないという点ではシスレーも同意見である、と書いている<sup>(21)</sup>。さすがにグループの長老だけのことはあり、ドガを排除するかたちで第7回展は3月1日、サン・トノレ通り251番地のパノラマ館で開催されることになった。

第7回展はこうした事情が背景にあったため、出品作はほとんどがデュラン＝リュエルの在庫であり、展覧会は実質的に「彼の画廊のショーウィンドウ」<sup>(22)</sup>となっていた。しかしデュラン＝リュエルの選りすぐりの作品だけあって、酷評されはしたもののルノワールの傑作《舟遊びの人々の昼食》などもみられ、必ずしもグループが積極的な意志をもって再結集したわけではないにしても、全8回を通じてもっとも印象派らしい展覧会というのが今日の定評となっている。また次の時代を担うことになるスーラとシニャックが来場したことも有名なエピソードだ。シスレーは27点を出品し、デュラン＝リュエルはいずれの作品も500フランから2,000フランの値を付けたが、一部に人気の出始めていたモネやルノワールならいざしらず、相変わらず売れないシスレーに最高額を付けたのはどういう理由によるのか、それを示す資料はない<sup>(23)</sup>。しかし売れるか売れないかの話はともかく、シスレーの作品は限定的ながらも高い評価を受けるようになり、ベルト・モリゾの夫でマネの弟であるウジェーヌはニースに滞在していた妻宛てに、パリからこう書き送っている——「シスレーはもっとも完璧で、大きな躍進を見せています。彼は、木立に囲まれた湖だか運河だかを描いており、これは本当の傑作です」<sup>(24)</sup>。見巧者のウジェーヌにこうまで褒められればシスレーとしては本望かもしれない。しかしこうした評価はまだ一般的にまではなっておらず、モネやルノワールも依然として酷評の対象であった。

事実上最後の印象派展である第7回展の終了後、シスレーは5月にロンドンのホワイト画廊に出品したが、これもまたデュラン＝リュエルの尽力による。画商はけんめいに売ろうとするが、画家の生活は相変わらず困窮しており、9月にはヴヌー＝ナドンからすぐ近くのモレ＝シュル＝ロワンに転居するもその費用が出せない仕儀にいたったようで、ヴェントゥーリ版のデュラン＝リュエル宛ての2通目の手紙(9月14日付)は借金の要請である。

〔デュラン＝リュエル宛て2通目、1882年9月14日付、モレにて(Venturi, pp.55-56.)〕

デュラン様

ようやくモレに落ち着きました。今回の引っ越しと身の回りのことで、かなりの出費となりました。600フランの送金をお願いできれば忝く存じます。

今日から数日間、今まで失った時間を取り戻せるよう仕事をするつもりです。

敬具

A.シスレー

印象派がフランスおよび世界の画壇で重きをなしていく歴史において重要な役割を果たしたのは何とんでもなくデュラン＝リュエルであることは間違いないが、そのライバルにあたるのがセーズ通りのジョルジュ・プティ画廊であろう。そのジョルジュ・プティ画廊がデンヴァーによればこの年の4月、つまり第7回印象派展が終わったか終わりをかけていた頃、イタリア人画家のジュゼッペ・デ・ニッティスとともに「国際美術展」を創設した<sup>(25)</sup>。ここに招待されるのは12名の画家であるが、そのうち3名がフランス人枠で、リウールドによるとここにモネやピサロが注目したのである<sup>(26)</sup>。ジョルジュ・プティ画廊は豪華な内装で顧客を惹きつけていて、しかもデ・ニッティスは社交界で人気を博していた

から、後述するように（第8章）、何とか絵を売ろうと足掻いていた印象派の画家たちとしては良い機会であると考えたにちがいない。デ・ニッティス自身も官展派に転身するまえは第1回の印象派展に出品していたくらいだから、これらの画家たちはたがいにたんなる面識以上の交友があったのかもしれない<sup>(27)</sup>。こうしてジョルジュ・プティと印象派の画家たちの接近が始まり、とくにシスレーはやがてその結びつきをいっそう強めていくことになる。

もちろんデュラン＝リュエルとしてはいまさら独占的な地位を失うのはこれまでの苦勞が報われないことになるから不都合であり、これに対抗せざるを得ない。ただし、この春に第7回印象派展の準備を引き受けた経験から、グループ展を組織することの大変さが身に沁みていたのか、彼としては各画家の個展を順番に開催することで顧客の開拓をはかろうとしたのである。ドールトによれば<sup>(28)</sup>、11月4日、シスレーはパリに出てきてモネと昼食を取り、今後どのような形で展覧会を開くかについて議論するために連れ立ってデュラン＝リュエルを訪れたという。ここでモネは、風景画と人物画と両方のジャンルについてそれぞれ毎年展覧会を開催することを提案したとされるが、デンヴァーによれば、画家の「芸術的な個性が強ければ強いほど〔……〕団体存続の考えに反対する傾向が強かった」という<sup>(29)</sup>。モネにしてもルノワールにしても初期の印象派の技法に飽き足らず、たとえばモネはこの時点ですでに12点のサン＝ラザール駅の連作を完成させているし、ルノワールが古典への回帰を果たすのは間もなくである。したがってモネが団体展よりも個展を好ましく思うのは、その方が画家の個性をより鮮明に主張できるのだから当然といえよう。しかし、その全人生を通じて印象主義というものにほとんど疑問らしい疑問をもたなかったとされるシスレーは、モネとはちがった考えを示したのである。ヴェントゥーリ版に収録された3通目の手紙はそのことを雄弁に語っている。

〔デュラン＝リュエル宛て3通目、1882年11月5日付、モレにて（Venturi, pp.56-57.）〕

デュラン＝リュエル様

あなた様の昨日のご提案について考えれば考えるほど、賛同できずにあります。

あらゆる前例からはっきりわかるのは、グループ展は大抵の場合に成功したが個展は概して成功しなかったという事実です。

あなたのご提案だと、個展を連続して開催するばかりでなく、けっきょくは全体としてある種の常設展になってしまうでしょう。たしかに画商であれば自分の画廊でそういうことできるかもしれませんが、でもそんなことになると、そこに集められた画家たちはみんなからうんざりされたり、反感を買ったりしないわけにはいきません。われわれの展覧会が同時におこなわれようがひとりずつ順番に（同じ場所で）おこなわれようが、人々からすればわれわれはやはり《印象派》という括りになるのですから。これから毎年定期的に展覧会をするべきかどうか、という問題なら、それを検討することはわたしにもよく理解できます。しかし年に一度の展覧会をおこなう以上は、展覧会はグループで開催するのがわれわれの利益になるでしょう。

われわれもようやく放浪者であることをやめ、定住の地、しかも好立地の場を得られたいま、別の形態の展覧会を始めようと考えたり、そのためにあれこれ試したりす



るのはいかがなものかと思えます。わたしに言わせるなら、われわれもあなたも関心のあるところはひとつ、つまり多くの作品を展示することよりも、われわれが制作する絵を売るのに必要なことをやるということ、これが重要なのです。そのような成果を得るには、それぞれの画家の選り抜きの絵画を少しずつ展示するグループ展のほうが効果的ですし、また確かな成功にもつながるだろうと考えます。以上が、わたしが個展に反対する理由です。これについてあなた様はどのようにお考えでしょうか。

敬具

A.シスレー

シスレーがこの手紙でいうところの「定住の地」、もしくは「好立地の場」とはデュラン＝リュエルが新たにかまえたマドレーヌ大通り9番地の画廊を指す。デュラン＝リュエルが個展に関心をもつのは、たんにグループ展は準備がたいへんであるという理由だけではない。これまで印象派に莫大な金額をつぎこんできたデュラン＝リュエルにしてみれば、ジョルジュ・プティ画廊との競合において優位に立つ必要があり、ともすればより条件のよい方へと惹かれがちな画家たちとの関係を強化するためにもそれぞれの画家の個性を重視するのが得策であると判断したのであろう。しかしデュラン＝リュエルのそういう思惑にシスレーの理解は届かなかったようだ。また、モネやルノワールたちがそれぞれ印象主義を自分なりに消化し、さらにそこから次の境地を切り拓くために個展に傾くのに対し、シスレーにおいては印象主義というものが一種の完成したものの、いわば完全形式であるという気分があったようで、彼があくまでもグループ展に固執するのはそういう芸術上の、意識にはのぼらない程度の素朴な信念があったと思われる。こうして1882年は最後の「印象派」展が個展へと解体してゆく姿をみせつつ終わることになる。

## 6 1883年

シスレーの反対にもかかわらず、デュラン＝リュエルはグループ展から個展へという方針の転換を変更しなかった。マドレーヌ大通りの画廊ではまず3月にモネ展、4月にはルノワール展、そして5月にはピサロ展が開催される。シスレー展は6月に開催され、それこそ「ひとりずつ順番に」月替わりで開かれることになったのはデュラン＝リュエルの目論見どおりである。いずれの個展でも展示数は約70点と、グループ展にくらべるならひとりの画家の展示数としてはきわめて多い。しかし売れ行きがそれだけましかと言えば、残念ながら売れないことには変わりはない。その間、ドールトによればシスレーの妻ウジェニーの病気が再発し、シスレーは4月18日、その様子を印象派の支援者でモネのかかりつけの医師であったジョルジュ・ド・ベリオに書き送っている<sup>(30)</sup>——「こちらはとてもすばらしい気候です。また仕事にとりかかっています。ところが春というのはつれないもので、果樹の花は次から次へと咲き、そしてあっという間に散っていきます。ようやく私が仕事を始めたばかりだというのに。風景画家という仕事では、すべてがばら色というわけにはいきません。今朝も逃げ出すほどの激しい風でした。空が曇っています……でもよく言うように、苦あれば楽ありです。束の間でも、こうしてあなたとおしゃべりができるの

ですから。ピサロとお会いになりましたか。彼は個展の準備をしていますか。ルノワールの仕事は捗っていますか。あなたとお会いできる楽しみがいつのことになるやらわかりませんし、私にはもちろん消息が届きません」。モレの風景に満足しつつも季節の移り変わりの速さに驚くシスレー。ピサロの準備している個展というのはデュラン＝リュエルの画廊で5月に開かれる予定のものを指す。仕事の苦勞とやり甲斐について語るそのテキストからはひとりの孤独な風景画家の姿が透けてみえるが、同時にまたルノワールやピサロたちへの気遣いは、それぞれ行く道は離れ離れになっても仲間同士がたしかな絆で結ばれていることを示している。

この手紙の二日後の4月20日にマネが壊疽の悪化のために左足を切断し、その10日後の30日に手術の甲斐もなく、苦しみながら亡くなる。義妹にあたるベルト・モリゾが姉のエドマに書き送った手紙によれば、それは「たえようもない、恐ろしい臨終」であり、「若かりし日の過ぎし日のことども、そしてあらゆる仕事が、崩れ落ちてゆく」と彼女は描写している<sup>(31)</sup>。マネはサロンの征服を目指すという点ではゆるぎない信念をもっていたが、苦闘の末に念願のレジオン・ドヌールを受勲するまでになっており、彼の野心は世俗的な面ではみだされたというべきであろう。印象派の父といわれ、19世紀の美術史を書きかえたマネがそれなりの栄爵につつまれて亡くなったということは、マネを師とも仰ぐ印象派の画家たちにとっては確実にひとつの時代が終わり、新しい時代の始まりであったはずだ。ただ、シスレーがマネの死に関してなんらかのコメントをのこした形跡は見当たらない——もっぱら抒情的な風景画を専門とするシスレーとまったく画風がちがうのはたしかであるが。

かつてモレに来ないかと誘ったモネが、オシュデ夫人のアリスと大勢の子供たちとともに終生の地ジヴェルニーに去ってゆくのを5月に見送り、6月にはいよいよ問題の個展がデュラン＝リュエルの画廊で始まった。同時期にデュラン＝リュエルはロンドンのダウデスウェルス画廊でも印象派の面々の展覧会を開いていたが、ジャーナリズムには相手にされず、しかも相変わらず強気のデュラン＝リュエルが高値で売り出したためにまったく売れなかった<sup>(32)</sup>。個展ではモネやルノワールたちと同じように70点が展示されたがやはり売れない。いかに売れなかったかについては、6月12日にピサロがモネにこう書き送っている<sup>(33)</sup>——「収入の問題は、状況が悪いとしかいえません。これには私たちみんな、困っています……ロンドンでもパリでも、売却が行き詰まっていることは知っているのです。私の個展も、収入についていえば、何もありませんでした……シスレーなど、もっとひどいです。とにかくまったく何も売れなかったのですから。(中略)。デュラン＝リュエルはとにかくやる気満々、何がなんでも私たちを出したいのです……他の画商や、絵の投機家たちが、『彼もあとせいぜい一週間もちこたえられる程度だろう』と言っているのを確かに耳にしましたが、こうしたことは、もう数カ月もいわれ続けています」。売れないことでは人後に落ちないピサロからもこのように同情されるのだから、シスレーの「売れなさ」が想像できる。

しかしどの画家も同じだが、シスレーもまた売れないからといって仕事に手を抜くなどということはない。ヴェントゥーリ版の4通目、つまり7月15日にモレで書かれた手紙は金銭的苦境にあってもなお制作の手をゆるめようとしないシスレーの姿を映し出している。

〔デュラン＝リュエル宛て 4 通目、1883年 7 月15日付、モレにて (Venturi, p.57.)〕

デュラン＝リュエル様

絵をお送りするのが遅れてしまいました。わたし自身がお届けに上られるものと希望していたのですが、六日前から外に出られるようになったとはいえ、まだ旅行をする体力は戻っておりませんでした。お送りするのは以下のとおりです。

10号を 2 点

20号を 1 点

10号の 2 点は250フラン、あなた様のところにある20号は400フランで勘定しております。

今回お送りする20号は300フランになります。

そういうわけですから、あなたのところには250フランの10号が 3 点ということになります。

400フランの20号 1 点

300フランの20号 1 点

お借りしている金額に間違いがありましたので、これをはっきりさせておきたいと存じます。以下のとおりです。まず1882年10月31日に1,000フラン借用しました。同日、あなた様へ2,700フラン分の作品をお持ちし、その内1,800フランを12月20日までに頂きましたので、この分については差し引き900フランがわたしの貸方になります。12月21日に1,500フラン分の絵をお持ちし、1883年 1 月24日までに1,400フランを頂戴しましたので、わたしの貸方は100フランになります。

〔借金の1,000フランに対して貸しの分も1,000フランになるという〕わたしの申し分に間違いはないことをご理解くださるものと信じております。シャルパンティエの絵にあなた様がお支払いくださった分は数えておりません。しばらくは遅れを取りもどすために、そしてあなた様の出資者から苦情が出ないように仕事に没頭するつもりです。

それはともかく、目下のところまったくの手元不如意で、しかもこれから月末になることをどうかお忘れになりませんように。あなた様の援助を頼りにしております。

敬具

A.シスレー

このやりとりから分かるのは、シスレーとデュラン＝リュエルの間に絵の価格についてある種の取り決めがあり、それによって貸借がおこなわれているということだ。そしてシスレーの絵は売れないし売れたとしてもせいぜい100フランかもう少しであったことを思うなら、10号で250フラン、20号で300から400フランというのはいい値段である。これだとデュラン＝リュエルは買えば買うほど持ち出しになるわけで、1883年には多少景気が持ち直していたとしても画商の苦労は並大抵のものではない。シスレーはせつせと描けば、そして描いたものをデュラン＝リュエルのもとへ持っていきさえすれば金になるわけだが、

文面からわかるように、さすがのデュラン＝リュエルも全額を即金でわたすことはできなかったようだ。彼はたとえばダガから《踊りの稽古》を5,000フランで購入するやただちにメアリー・カサットの兄にそれを6,000フランで売り渡すといった具合に、画商として当然ではあるにしてもかなりきわどい商売をしているが、他方でほぼ同じ時期に困窮するピサロを救うために12,000フランを支出していたりする<sup>(34)</sup>。こういう金銭の忙しさはひとえにデュラン＝リュエルの画商としての器の大きさの証しとみるべきで、シスレーのみならず印象派の歴史においてデュラン＝リュエルの果たした役割がいかに大きなものであったかを、シスレーのこの手紙から読み取らなければならない。

翌月にはヴェントゥーリ版の5通目の手紙が書かれる。8月24日にモレで書かれたこの手紙でも、話題は金銭のことである。シスレーはモレからすぐ近くのヴヌー＝レ＝サブロンに引っ越すことにしたので、その費用が必要になったのだ。

〔デュラン＝リュエル宛て5通目、1883年8月24日付、モレにて（Venturi, p.58.）〕

デュラン＝リュエル様

お送りくださいました200フラン、確かに受け取りました。感謝いたします。しかしながら、これでもまだ少しばかり不足するようです。

近いうちにかなりの数の作品をお届けします。今わたしは可能なかぎり仕事に励んでいます。来月にはかなりの金額が必要になるからです。わたしは出来るだけ早くモレから引っ越すことを決めました。ここではあまり体調がよくないのです。一年分の家賃はあきらめざるを得ないでしょう。ただ、いまの家を貸すことができればその点はうまくいくかもしれません。そもそも遠くに行くつもりはありません。レ・サブロンに落ち着くつもりです。ここからほんの15分ほどのところですが、空気は今より良くなるでしょう。

敬具

A.シスレー

妻の病気の「再発」といい、シスレー本人の体調不良といい、彼らが将来においてあいっついで癌で亡くなることを思えば、そういう病気が懸念されるが、時期的にみてここではそういうものではないと思われる。ただし転地が必要なほどの躰の不調というものがどんなものなのか、他の資料がないので不明である。ここではむしろ、わずか15分の距離にすぎない引越しですら金銭的に容易ではないほど生活に余裕がないこと、またデュラン＝リュエルに頼る以外に収入のないことをみるべきであろう。

9月にはボストンで「外国展」が開催された。例によってデュラン＝リュエルの企画で、デンヴァーによればこれはアメリカにおける最初の重要なグループ展であった。アメリカが今日フランス以上に印象派の名画を所蔵する「印象派大国」であるのは、周知のとおり、フランスでの苦境を脱するために画商や画家たちがアメリカに販路を求めた結果でもあったのだが、このボストン展はそのはしりとも言うべきものであろう。もちろんシスレーも3点を出品したが、この時点ではまだアメリカも美術に関してはさほど開放的ではなかつ

たのか、「新聞・雑誌に取り上げられることさえなかった」<sup>(35)</sup> という。

10月に予定どおりレ・サブロンに転居し、そのレ・サブロンからデュラン＝リュエルに宛てた手紙がヴェントゥーリ版では6通目の、そして1883年最後の手紙である。日付は11月21日。

〔デュラン＝リュエル宛て6通目、1883年11月21日付、レ・サブロンにて (Venturi, p.58.)〕

デュラン＝リュエル様

300フランを受け取りました。売れ行きが華々しくないことは重々承知しております。ですが、わたしが多くを要求する人間ではないこともどうかご理解ください。ひどい季節ですが、ひどいなりに出来るかぎり仕事に専念しています。近いうちに何点かお持ちします。いい作品になるよう、最善を尽くします。しかし、月末までに500フランをお願いしなければなりません。

敬具

A.シスレー

こうして、1882年の恐慌から多少は立ち直り、また販売のための新しい試み、つまりグループ展から個展へという変更もおこなわれた1883年であったが、最後の手紙は相変わらず金の無心で終わる。他方、マネが亡くなり、モネがジヴェルニーに去り、印象派の歴史も確実に変化しつつあった。しかしシスレーはあくまでも自己の画風を守り続ける。

## 7 1884年

この年は前年4月に亡くなったマネの回顧展から始まる。回顧展はエコール・デ・ボザールで1月5日から開催され、翌2月にはマネがアトリエに遺していた作品159点がオテル・ドゥルオーでオークションにかけられた。このときの売り上げはデンヴァーによれば116,637フランであったというから、単純に計算すれば1点当たり700フランをこえる。しかし作品にはデッサンなども少なからず含まれていたろうから、油彩にかぎっての単価はもっと上がるはずで、たとえば《バルコニー》は3,000フラン、《ラテュイユ親父の店》は4,400フランで落札されている。そしてあの《オランピア》にはデュラン＝リュエルが10,000フランの値を付けるといった具合で、すでにマネの評価はほぼ定まりつつあったと言えるだろう<sup>(36)</sup>。そしてマネに続いた印象派の画家たちについても、わずかにではあるが一般の見方に変化がきざしつつあるようにも思える。たとえば批評家のフェネオンは、マネの回顧展について記事を書き、マネに感嘆している大衆に「助言」をすると称して次のように述べている。すなわち印象派の画家たちが現代生活を表現するのはマネの影響であって模倣ではなく、しかも彼らは時としてその「先導者を凌駕して」さえいるのである、と。そしてフェネオンはそれらの画家を名指しする——ピサロ、ルノワール、ラファエリ、メアリー・カサット、モネ、フォラン、ドガ、ド・ニッティス、ベルト・モリゾ、つまり「印象主義の華々しい仲間たち」であり、もちろんここにはシスレーの名も挙げられている<sup>(37)</sup>。



しかしフェネオンはもともと印象派に好意的な批評家であり、これは言うなれば身びいきに近い。じっさいのところはマネの評価は高まったにしても、その評価が印象派の画家たちにただちに及ぶことはなかった。したがってシスレーたちの生活苦も相変わらずである。ヴェントゥーリ版に収録されたシスレーの7通目と8通目の手紙は、それぞれマネのオークションから間もない3月7日と3月9日の日付をもち、いずれもレ・サブロンで書かれている。

〔デュラン＝リュエル宛て7通目、1884年3月7日付、レ・サブロンにて (Venturi, pp.58-59.)〕

デュラン＝リュエル様

再び仕事に取りかかっております。いま制作しているのは数点の油彩です（水辺の風景を描いています）。

この好天を出来るかぎり利用して、仕事に没頭したいと思っております。もし可能でしたら400フランをお送りいただけると大変ありがたいのですが。2週間以内に出来上がった絵をお届けします。

敬具

A.シスレー

〔デュラン＝リュエル宛て8通目、1884年3月9日付、レ・サブロンにて (Venturi, p.59.)〕

デュラン様

お送りくださった200フラン、間違いなく受領しました。

お金の無心ほど嫌なことはありません。今回のお願いもいよいよ困り果ててのことでした。それに、お分かりいただけるものと信じておりますが、いつもほんのささやかなお願いでしかありません。今日頂戴した200フランも明日の支払い用なのです。

敬具

A.シスレー

〔ヴェントゥーリ版原注〕この手紙はHenraux氏のコレクションにて保管されていたものである。

ピサロはデュラン＝リュエルが買ってくれるだけでは到底生活ができないので、パリに出てくるたびにあちこちの画商に売り込んで歩いたそうだが、おそらくピサロ以上に貧しくはあっても、諸事遠慮がちなシスレーにそのような行商人のまねごととはできなかったであろう。この手紙の半月後の3月25日、デュラン＝リュエルはシスレーから5点の絵画を1,700フランで購入した（ただし即金で支払ったかどうかは不明）ほか、4月にはロンドンのダドリー画廊で印象派の展覧会を催し、販売に力を入れる。まさに八面六臂のデュラ

ン＝リュエルである。ところがこの時期、彼は破産に瀕していたのである。

リウオルドがフェネオンの証言を引用しているが<sup>(38)</sup>、それによれば1884年においてデュラン＝リュエルには約100万フランの負債があった。デュラン＝リュエルは印象派の画家たちの作品に高値をつけるのがつねで、それは自分の取り扱う分野が値崩れしないようにという配慮でもあったが、いちばんの要因はそれだけの価格で売らなければ元が取れないという事情もあったはずだ。シスレーにしても実勢価格を大幅に上回る値段で引き取り、しかも貧乏なピサロに同情されるほど売れないのだから、彼にわたす金額はほとんどがデュラン＝リュエルの持ち出しであったろう。またデュラン＝リュエルはロンドンなど外国でもさかんに活動しており、そうした営業費も莫大な金額にのぼったはずで、それが回収できるほどの売り上げがあったとは到底思えない。フェネオンによればこの時期のデュラン＝リュエルは、「砂漠にでも行って暮らせたならどんなにいいだろう!」といい、また前年の11月にピサロに宛てた手紙でデュラン＝リュエルは、十分な金を渡すことができずに申し訳ないが、今はどうにもできない状態で、それなのに「災難にも笑って対処しなければならず、まるでお金持ちのようにふるまわなければならない」と、彼らしくもない愚痴をこぼしている<sup>(39)</sup>。

こうした窮状を知って知らずか、6月には以前からの支援者ミュレルがルーアンの自分のホテル（オテル・デュ・ドーファン・エ・ド・レスパーニュ）で彼が所蔵する印象派のコレクションの展覧会を開催した。しかしこの展覧会は販売目的ではないようで、シスレーたちの窮状を救うことにはならなかった。またブルジョワの支援者というものはがいして気まぐれなものであり、定期的な生活支援といったことに関心を示した形跡はない<sup>(40)</sup>。デュラン＝リュエルが売れない画家たちにとっていかに頼りになる存在であったかといえ、この翌年5月にゴーギャンがピサロ宛に書いた手紙からもうかがえる。1883年1月に不況のあおりで証券会社を退職して画家の道に入ったゴーギャンであったが、しかしそれですぐに生活できるほど絵の道は甘くない。貯えを食い潰し、絵は売れず、もとの証券マンにも戻れず、ゴーギャンはコペンハーゲンの妻のもとで居候のように暮らしていたが、いよいよ進退窮まってピサロに泣きついたのがこの手紙である。それによれば、自分は今異国の地にあつて金も気力もなく、毎日屋根裏部屋に登っては首を括ることばかり考えている。絵を描くことしか自分にはできないのに、その絵具を買う金すらない。また描いたとしてもまるで売れない——「絵画もデッサンも何も売れません。たった10フランでも売れないのです。近いうちにパリに違うものを送りますので、デュラン＝リュエルに、『いくらでもいいので』、絵具が買えるように、どれかを買ってもらえるよう頼んでみてはくれませんか」<sup>(41)</sup>。ゴーギャンはピサロと親しかったので、貧しいピサロがデュラン＝リュエルからどのような援助を受けていたか、またその援助の程度はどんなものであったか、十分に承知していただろう。「いくらでもいいので」というところにゴーギャンの苦境とデュラン＝リュエルへの期待があらわれている。かつて1877年から1880年まで、デュラン＝リュエルが最初の苦境に陥ってシスレーたちの援助ができなくなった時期があり、その時期に彼らはじつに苦労を重ねたわけだが、こうしてデュラン＝リュエルがあらためて経済的に追いつめられたこの年、以前の苦闘の時代がふたたび訪れることになったのである。

他方、かねてより自由を主張していた画家のグループは、6月には無審査と無褒賞と自由な展示を規約とする「独立芸術家協会」を設立した。そして12月2日にはこの「独立芸術家協会」が第1回アンデパンダン展を開催したのである。この記念すべき第1回展には、若きスーラともっと若いシニャックが参加しており、いわゆる点描画法が世間の耳目をひくことになる。絵画における前衛はすでに印象派ではなく、また創立メンバーはモネもルノワールもすでに印象派の技法や理念に飽き足らなくなっていた。ひとりシスレーだけがもっとも忠実な印象派として絵を描き続けているのである。こうして、なかば時代に取り残されつつシスレーはもっとも印象派らしい印象派として絵を描き続け、しかも頼りとする画商は破産寸前という悲惨な境遇におちいって1884年は終りを迎える。

## 8 1885年

頼みの綱のデュラン＝リュエルが破産に瀕し、シスレーの生活はいつその苦境を経験することになる。しかしかろうじて救いとなる出来事は、おそらくこの年の前半と推測されるある時期、ブッソ・エ・ヴァラドン画廊のテオ・ヴァン・ゴッホがシスレーの作品を初めて購入したことであろう。この画廊はゴッホ兄弟が勤めた有名なグーピル商会のことで、1884年に創立者のアドルフ・グーピルが引退し、その店を共同経営者のレオン・ブッソとその娘婿のルネ・ヴァラドンが継いだのであり、かつての出資者の親戚筋にあたるテオはそのままパリのモンマルトル大通り店に勤務し、1881年から1890年まで（つまり兄フィンセントが亡くなりみずからも病に倒れるまで）支配人をつとめていた。テオは堅実なアカデミズム派だけではなく、バルビゾン派を積極的に扱っていたが、しだいに印象派の画家たちも扱うようになってきたのである。有能な画商であるテオの視野に入ってきたということは、ジョルジュ・プティ画廊の台頭ともあいまって、印象派が徐々に画壇で重きをなし始めていたことを示すものと言えよう。テオはこのシスレーの作品をその日のうちにあるコレクターに売却したが、300フランで購入して400フランで転売したのだから<sup>(42)</sup>、その価格はデュラン＝リュエルのそれとほぼ同じである。少なくともテオとデュラン＝リュエルに関するかぎり、シスレーはすでに「1点100フランの画家」ではない。

ブッソ・エ・ヴァラドン画廊のテオのシスレー購入との前後は定かではないが、フックによれば<sup>(43)</sup>、3月31日から4月2日にかけての3日間、アメリカ美術協会でバルビゾン派のオークションが開かれ、じつに406,910ドルの売り上げが記録された。これによりアメリカという巨大市場がパリで注目されるようになり、デュラン＝リュエルも強い関心を示すようになるが、本格的なアメリカ進出は1886年を待たねばならない。そして5月4日、ジョルジュ・プティ画廊が企画した国際展に、いよいよモネが出品することになる。もともとセーズ通りとゴドー・ド・モロワ通りの角に位置するジョルジュ・プティ画廊は「大理石と赤い織物が飾られた25×15メートルの豪華な画廊」として知られていて、アスリーヌによれば、その「裕福さと権力、支配力と経済的繁栄」にはどんな画家も無関心ではいられなかったという<sup>(44)</sup>。モネがジョルジュ・プティ画廊に展示することを知ったデュラン＝リュエルは激怒したという<sup>(45)</sup>。しかしアスリーヌも言うように、販売ルートを多様化することは画家たちの利益であると同時に、印象派の絵画が美術マーケットにおいて扱われる機会の増大にもつながる。そしてそれが結果的にはデュラン＝リュエルを苦境から救う

ことになる。とモネたちが考えたというのは、自然である。

しかし、いわば印象派のフロントラインでおこなわれていた駆け引きはシスレーにはほとんど無縁であったようだ。ヴェントゥーリ版のこの時期の2通の手紙、つまり6月12日付の9通目、それに7月24日付の写真複写の手紙は、相変わらず送金受領の連絡にとどまる。

〔デュラン＝リュエル宛て9通目、1885年6月12日付、レ・サブロンにて (Venturi, pp.59-60.)〕

デュラン＝リュエル様

先日頂戴した300フランで、大体の支払いは済みました。でも近日中にまたお金が足りなくなりそうです。今月の20日が支払期限の借金があるのです。全力で仕事に取り組んでいますので、来月初めには何点かお届けできると思います。数日前からこちらはすばらしい天気です。ただ、風がつよくて、絵を描くのに難儀しております。ギュメがレ・サブロンに来ています。彼が習作を描いているところに出会ったのです。あなたがお話しになっていた伝記ですが、近いうちにお送りいたします。それでいいかどうか、あとでお知らせください。

敬具

A.シスレー

ここで言及されている「ギュメ」とは風景画家のアントワーヌ・ギュメ（1843－1918）で、日本ではほとんど無名に近いが、マネの1869年の傑作《バルコニー》の登場人物である。二人の女性（左側の手すりに身をもたせているのがベルト・モリゾ、右側で傘を抱えているのがファニー・クラウス）の後ろにネクタイ姿の威厳のある紳士が立っているが、この人物がギュメである。彼はバルビゾン派に親炙していたので、風景がもっとも美しい姿を見せるこの季節、絵の材料を求めてこの界隈でスケッチ旅行でもしていたのだろう。

〔デュラン＝リュエル宛て写真複写の手紙、1885年7月24日付、レ・サブロンにて (Venturi, p.63.)〕

デュラン＝リュエル様

あなたがお送りくださった200フランは間違いなく受け取りました。感謝いたします。近日中に作品を何点かお届けいたします。〔数語解読不能〕

敬具

A.シスレー

デュラン＝リュエル宛ての手紙では、受け取った金額は200フラン（もしくはその前後の金額）であることが多い。したがってこの金額は作品の対価というよりも、あるいはそういう体裁であったとしても、実質的にはデュラン＝リュエルからの生活援助とみるべきであろう。ゴッホが弟から受けていた仕送りは150フランであったから<sup>(46)</sup>、それよりは多い

にしても、家族を抱えての生活は容易ではなかったはずだ。たまに売れる絵の代金がいわば臨時収入となって家計を支えていたものと推測される。

ヴェントゥーリ版におけるデュラン＝リュエル宛ての10通目の手紙（11月7日付）は、いつもとは趣きが異なる。これはいわゆるドービニーの贋作事件に巻きこまれたデュラン＝リュエルへの全面的支持を表明する手紙なのである。

〔デュラン＝リュエル宛て10通目、1885年11月7日付、レ・サブロンにて（Venturi, p.60.）〕

デュラン＝リュエル様

100フランを受け取りました<sup>(47)</sup>。あなたが『レヴェヌマン』誌に投稿された2通の書簡は大変すばらしいものでした。だれもあなたほどもごとな反論はできなかったでしょうし、われわれのためにずっと昔からあなたに仕掛けられてきたこの陰険な争いを、あれほどもごとに暴露することもできなかったでしょう。だれがみても、正しいのはあなたです。これは商売上の問題ではありません。あなたが長いこと擁護しておられる芸術の問題なのです。わたしはあなたに心から感謝しております。あなたがわたしにかけてくださった言葉のおかげで、仕事への意欲が掻きたてられています。ただ、残念ながら今のところ天候がよくありません。寒さ、霧、雨などが続いています。まもなくサン＝マルタンの日〔11月11日〕ですが、きっと美しい小春日和となるでしょうから、そうになったら遅れを取り戻そうと思っています。

あなたに握手を

A.シスレー

事件についてここでは詳述しない。ただ、かねてデュラン＝リュエルを商売仇としていたパリの画商たちにとって、この事件が彼を追い落とす格好の材料となったことは間違いない。印象派の存在感が少しずつ大きくなりつつあった当時、これらの画家たちをいわば独占していたデュラン＝リュエルは他の画商たちからすれば商売上の脅威であり、彼らの敵意的であったデュラン＝リュエルにとって、10月末からパリのジャーナリズムをにぎわせていたこの事件はあやうく彼の画商としての命を絶ちかねないものであった。しかし彼は11月5日にみずからの潔白のあかしとなる決定的な書簡を同誌に掲載し、これによって陰謀が暴露され、事態は収束したのである。この手紙でデュラン＝リュエルは、シスレーを含む印象派の絵画を「もっとも美しいコレクション」と絶賛しており、これによって「仕事への意欲が掻きたてられ」たのはもちろんシスレーだけではない<sup>(48)</sup>。

しかし、デュラン＝リュエルの疑いが晴れたからといって、シスレーの生活が好転するわけではない。事件の興奮がおさまると、そこに待ち構えているのはまたしても生活苦である。ヴェントゥーリ版の11通目（11月17日付、レ・サブロン発）の手紙は、すでに恒例となった200フランの受領の手紙である。



〔デュラン＝リュエル宛て11通目，1885年11月17日付，レ・サブロンにて（Venturi, pp.60-61.）〕

デュラン＝リュエル様

200フランをたしかに受け取りました。今月の20日に期限がくる手形の支払いと、その他いくつかの小口の借金の返済に遣わせて頂きます。でもその後は？ 21日になれば再び一文無しです。それなのに、肉屋と食料品屋にいくら入れなければなりません。肉屋にはもう半年も支払いが滞っていますし、食料品屋には1年も不義理を重ねています。それに、これから冬ですからその準備にもいくらのお金が必要です。どうしても必要なのに不足しているものがいくつかあるのです。少しは落ち着いて仕事ができるだろうと期待していたのですが。

今はすっかりお手上げの状態です。明日か明後日には、3点の絵をお送りします。完成した作品はいまのところそれで全部です。

敬具

A.シスレー

冬が近づき、金はなく、借金も返せず、しかも新たに金が必要となる。それでいて着実に仕事を続けるシスレーの姿がここにある。

ヴェントゥーリ版の12通目の手紙がこの年の最後の手紙で、それは11月25日の日付を持つ（レ・サブロン発）。

〔デュラン＝リュエル宛て12通目，1885年11月25日付，レ・サブロンにて（Venturi, p.61.）〕

デュラン＝リュエル様

……愛好家の好みについては、お立場あなたの方がわたしよりもよくご存じです。ですから、あまり売れそうにないとあなたが思うその2点の作品を、わたしの方へ送り返して頂けますでしょうか。今度パリに出かけるさいに、代わりの作品をお届けしますので。こちらの様子は相変わらずです。

敬具

A.シスレー

作品が売れず、デュラン＝リュエルに大きな負担をかけていることはシスレー自身も承知していて、この文面からもそのことはうかがえる。しかし、負い目を感じつつも米塩の資を頼らざるを得ない貧乏暮らし。貧苦に耐えつつ仕事を続ける以外に彼の人生はない。シスレーの苦闘は続く。（以下次稿）

## 注

※邦訳のある場合、頁数表記は邦訳文献のそれを示す。

1. Rewald, p.478.
2. Rewald, p.467.
3. ただしここで使用されるのは1939年の初版ではなく、1968年の復刻版である。この版には若干の落丁が見受けられるが、それらは他のエディションによって補完しうる。
4. Gachet, pp.125-127.
5. Cogniat, p.177.
6. *Ibid.*
7. もちろん競売の情報がいつどのような形でシスレーの耳に入っていたかは実証できない。
8. Daulte, p.46.
9. 1875年3月のオテル・ドゥルオーのオークションでも、ドールトによればシスレーの作品は21点で2,440フランにしかならなかった (p.38)。平均すれば1点につき約100フランである。またデンヴァーによれば1877年5月のオテル・ドゥルオーのオークションでもシスレーの絵は105～165フランであった (Denvir, 1993, p.101) というから、それが当時の美術市場のシスレーに対する評価で、こうしてみるとデュラン＝リュエルの厚遇ぶりがあらためて印象づけられる。
10. ドールトによれば、デュレはこのとき仕事仲間の『ル・シエクル』誌主幹のジュールドに頼んで7点を買収取ってもらっている (p.46)。
11. Daulte, p.46. および Marc Restellini, 《Alfred Sisley Peintre de la lumière, des ciels, des eaux et des arbres》。(マルク・レストリーニ「アルフレッド・シスレー——光と空と水と木の画家」中村隆夫訳, 『図録シスレー展』, 2000年所収, p.24)。
12. 島田, 2011, pp.24-26.
13. Rewald, pp.325-326.
14. Denvir, 1993, pp.117-118.
15. A. Tabarant, *Pissarro*, Paris, 1924, cité par Rewald, p. 46. フックによれば、印象派の革命は絵画の売り方にも及んでいて、そういう変化を促したのがまさにデュラン＝リュエルだという。(Hook, pp.27-28.)
16. Denvir, 1993, p.122, および Cogniat, p.86 et p.177.
17. Rewald, p.325.
18. 『図録シスレー展』, 2000年, p.158.
19. Daulte, p.50.
20. *Ibid.*
21. Rewald, p.334.
22. Denvir, 1993, p.131. 出品作は全部で210点, うちモネが35点, ピサロが34点, ルノワールが25点, モリゾが12点であった。
23. パリに不在の妻ベルトの代理としてこの展覧会に関わっていたウジェーヌ・マネは、妻にこう書き送っている——「印象派たちは成功している。とくにルノワールとシスレーは。デュラン＝リュエルはシスレーの絵を2,000フランで売った。エドアールは、高値をふっかけてみるもんだと言っている」。(Denvir, 1993, p.133.) 「エドアール」とはもちろん実兄のエドゥアール・マネのことだ。いわば同志であるウジェーヌにとっても、シスレーの2,000フランというのは高すぎると思われたのである。
24. Rewald, p.336.
25. Denvir, 1993, p.129.
26. Rewald, p.345.
27. デ・ニッティスの場合、あまり画面を滑らかに仕上げずにタッチをそのまま残すといった技法や、都市の情景とそこに住むブルジョワたちを描くなど、技法の点でも主題の点でもたしかに印象派に近いかもしれない。しかしモネやルノワール、あるいはシスレーに特徴的な、光と色彩に対する食欲なまでの熱情はほとんど感じられない。あえていえばドガの画風を彷彿させる。
28. Daulte, p.50.
29. Denvir, 1987, p.139.
30. Daulte, p.52.

31. バザン, p.71. もっとも、その9年後の1892年には夫のウジェーヌが、そして1895年には自分自身が亡くなってしまふ。そしてマネの唯一の、そして女の弟子であるエヴァ・ゴンザレスも1週間後の5月6日に、出産が原因で亡くなった。享年34。
32. Rewald, p.347.
33. *Ibid.*, p.348. 6月の個展でもデュラン＝リュエルはシスレーに2,000フランの値を付けており、多少は景気が回復してきたのは確かであるとしても、これではなかなか買い手もつかないだろう。いわゆる「実勢価格」が前述したように100フランかその程度だとすれば、その20倍の値段になってしまう。「売れる」値段ではない。しかしデュラン＝リュエルとすればこういう価格設定はやむを得ないところであったろう。
34. Denvir, pp.122-123.
35. *Ibid.*, p.135.
36. *Ibid.*, p.138. マネの友人であったアントナン・ブルーストによれば、ゾラはマネの回顧展にさいしてこう語ったという——「数日前まで嘲笑い、茶化していたすべての人びとが、今、勝ち誇った大芸術家の前に、公然の敬意を捧げるために集まってきた」。そしてオテル・ドゥルオーでのオークションでは、マネの絵は、「二、三年後にハネ上がった値段には及ばないが、すでに人びとを瞠目させる高さになっていた」と証言している。(Proust, pp.181-182.)
37. F.Fénéon, “A l'exposition d'Edouard Manet”, *La Libre Revue*, avril, 1884, cité par Rewald, p.340.
38. Rewald, p.363.
39. ビサロ宛の手紙, cité par Rewald, p.363.
40. もちろん周知のようにカイユボットやパジールなどは親身になって経済的な援助を惜しなかったが、彼らの場合には支援者というよりも、志を同じくする同世代の友人というべきであり、事実その通りであった。
41. ビサロの未公開資料に含まれる手紙, cité par Rewald, p.356.
42. 『図録シスレー展』, 2000年, p.158, および Rewald, p.365.
43. Hook, p.86.
44. Assouline, p.220.
45. *Ibid.*, p.239.
46. Ozanne et De Jode, pp.74-75. グーピル商会で支配人をつとめていたテオの給料は月額300フラン。テオは約10年にわたりここから兄フィンセントに月給の半額である150フランを送金していたのだが、ただでさえ苦しい遣り繰りであるのに、さらにオランダの実家をも援助していたという。
47. ドールトのファブリ版にはシスレーのこの手紙の写真複写が掲載されており、そこには冒頭のこの一文が写っている。ヴェントゥーリ版ではこの冒頭の文は省略されている。Daulte, p.52.
48. Assouline, pp.244-245. アスリーヌの紹介する手紙ではモネやルノワールも断固としてデュラン＝リュエルを擁護している。Voir aussi Venturi, p.60.

## Références

- ASSOULINE, Pierre : *Grâces lui soient rendues, Paul Durand-Ruel, le marchand des impressionnistes*, Gallimard, collection 《Folio》, 2002.
- COGNAT, Raymon : *Sisley*, Bonfini Press, Liechtenstein, 1968. (作田清訳『シスレー イール＝ド＝フランスの抒情詩人』, 作品社, 2007年。)
- DAUBERVILLE, Henry : *La bataille de l'impressionnisme*, Bernheim Jeune, 1967. (中山公男訳『印象派の戦い』, 毎日新聞社, 1970年。)
- DENVIR, Bernard : *The Impressionists At First Hand*, Thames and Hudson Ltd., London, 1987. (末永照和訳, 『素顔の印象派』, 美術出版社, 1991年。)
- DENVIR, Bernard : *The Chronicle of Impressionism : An Intimate Diary of the Lives and World of the Great Artists*, Thames and Hudson Ltd., London, 1993. (池上忠治監訳, 中西博之・松村恵理・隠岐由紀子・速水豊訳『印象派全史 1863—今日まで』, 日本経済新聞社, 1994年。)
- HOOK, Philip : *The Ultimate Trophy How the Impressionist Painting Conquered the World*, Prestel, 2009. (中山ゆかり訳『印象派はこうして世界を征服した』, 白水社, 2009。)

- OZANNE, Marie-Angélique, DE JODE, Frédérique : *L'Autre Van Gogh — Une biographie de Théo van Gogh*, Editions Olbia, 1999. (伊勢英子, 伊勢京子訳『テオ もう一人のゴッホ』, 平凡社, 2007.)
- PROUST, Antonin : *Manet*, Bruno Cassirer/Berlin, 2. Auflage, 1929. (野村太郎訳『マネの想い出』, 美術公論社, 1983.)
- RENOIR, Jean : *Renoir par Jean Renoir*, Librairie Hachette, 1962. (粟津則雄訳『わが父ルノワール』, みすず書房, 1964年.)
- REWALD, John : *The history of impressionism*, Museum of Modern Art ; 4th, revised edition, 1980. (三浦篤・坂上桂子訳『印象派の歴史』, 角川学芸出版, 2004年.)
- SHOAN, Richard : *Sisley*, Phaidon Press, London, 1994. (島田紀夫・松島潔訳『シスレー』, 西村書店, 1999年.)
- VENTURI, Lionello : *Les archives de l'impressionnisme : lettres de Renoir, Monet, Pissarro, Sisley et autres : memoires de Paul Durand-Ruel. Documents, I et II*, Burt Franklin, 1968. (1939年刊デュラン＝リュエル版の復刻)。
- ボオル・ガッシュ (GACHET, Paul) 編, 式場隆三郎訳『印象派画家の手紙』, 耕進社, 昭和10年。  
『現代世界美術全集20 ビサロ／シスレー／スーラ』, 集英社, 1973年。
- 島田紀夫『セーヌで生まれた印象派の名画』, 小学館, 2011年。
- 島田紀夫『印象派の挑戦 モネ, ルノワール, ドガたちの友情と闘い』, 小学館, 2009年。
- 『図録シスレー展』, 伊勢丹美術館, 1985年。
- 『図録シスレー展』, 伊勢丹美術館, 2000年。
- ジェルマン・バザン (BAZIN, Germain) 『マネ』, 大島清次訳, ファブリ版世界の美術, 印象派の巨匠たち 1, 小学館, 1976年。
- フランソワ・ドールト (DAULTE, François) 『アルフレッド・シスレー』, 松本芳夫訳, ファブリ版世界の美術, 印象派の巨匠たち 7, 小学館, 1976年。
- 三浦篤・中村誠監修『印象派とその時代 モネからセザンヌへ』 *Impressionists and their Epoch : From Monet to Cézanne*, 美術出版社, 2002年。

\* 本稿執筆にさいし, フランス語の解釈について Aurélie Heuschling 氏の協力を得た。ここに感謝の意を表する。

## Sur quelques lettres d'Alfred Sisley à Moret-sur-Loing

NIHEI Megumi, IZUMI Ryoichi

Alfred Sisley, peintre anglais de l'impressionnisme, a laissé peu de lettres, ou du moins celles qui nous sont parvenues sont rares, notamment les lettres rédigées pendant les dernières années de sa vie, lorsqu'il vivait aux alentours du Loing et qu'il s'éloignait de ses amis. Dans cet article, nous analysons des lettres qu'il a écrites principalement dans les années 1880 et 1890 quand il habitait à Moret-sur-Loing. Dans le but de mieux comprendre la valeur artistique de Sisley, nous comparons ces écrits à des lettres ou des témoignages d'autres peintres, marchands, et critiques d'art.